

気 象 講 演 会

科学からみる

「雪害対策」と「樹氷今昔」

全国有数の豪雪地帯である山形県、科学的な見地から雪害対策を考え、蔵王の冬の風物詩「アイスモンスター・樹氷」を解説します。

平成24年

日時

10月31日(水)

13:30~16:30(開場13:00)

入場
無料

会場

山形県郷土館「文翔館」 議場ホール

〒990-0047 山形市旅籠町3丁目4番51号

講師及び演題

1 「雪氷防災研究の最前線 —科学で雪害を減らせるか?」

講師：阿部 修氏 [(独)防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター新庄支所長]

2 「アイスモンスター100歳、樹氷140歳」

講師：柳澤 文孝氏 [山形大学理学部地球環境学科教授]

主催：日本気象学会東北支部 共催：山形地方气象台 後援：山形県・山形市・やまがたゆきみらい推進機構
問合せ先：山形地方气象台防災業務課 / TEL 023-622-0632

講師紹介

「雪氷防災研究の最前線 —科学で雪害を減らせるか?—



阿部 修

(独)防災科学技術研究所雪氷防災研究センター 新庄支所長

- 昭和46年 国立防災科学技術センター新庄支所 採用
- 昭和58年 同 研究員
- 平成5年 同 主任研究官
- 平成17年 (独)防災科学技術研究所雪氷防災研究センター 総括主任研究員
- 平成23年 同 新庄支所長

著書

『黄砂』（古今書院2009分担執筆）

『積雪観測ガイドブック』（朝倉書店2010分担執筆）

講演内容

雪氷災害（雪害）の発生を予測しようとすると、雪の量ばかりでなくその質が問題になる。例えば住宅がつぶれるかどうかは屋根上の雪荷重を知ればよいが、傾斜した屋根雪が滑落するかどうかは雪荷重とさらに雪質や密度を知る必要がある。屋根上の雪荷重でさえ、サラサラした降雪は強い風により吹き払われるので、それを予測しようとすると降雪の質が問題になる。ここでは、これら雪の性質に関して、当センターの研究がどこまで進展したか、今後解決しなければならない問題は何か、そして雪氷災害を軽減するためには何が必要かを考える。

講師紹介

「アイスモンスター100歳、樹氷140歳」



柳澤 文孝

山形大学理学部地球環境学科教授 理学博士

長野県出身

- 信州大学理学部化学科卒業
- 1990年山形大学理学部助手
- 1995年助教授
- 2008年より教授

専門 安定同位体地球化学

(1)酸性雨・越境大気汚染 (2)黄砂現象・沙漠化

(3)樹氷に関する研究（生成機構・越境汚染・温暖化影響など）

著書

『環境の地球化学』（培風館2007共著）

『よくわかるエアロゾル用語集』（京都大学学術出版会2004共著）

『検証・ヒトが招いた地球の危機—データが示す人類環境の現状』（講談社ブルーバックス1995共著） など

講演内容

冬の風物詩として親しまれている蔵王のアイスモンスター・樹氷ですが、「アイスモンスター（アオモリトドマツが着氷と雪片に覆われて巨大な塊となったもの）」と、学術用語の「樹氷（過冷却した霧粒又は雲粒が地物に吹きつけられてできた白色不透明のもろい氷）」は、全くの別物です。身近なアイスモンスター・樹氷ですが、意外と知らないことや誤解していることが多いものです。今回の気象講演会では、次のような疑問についてお話しします。

「樹氷」と言う言葉はいつできたのか？ アイスモンスターが見つかったのはいつなのか？

アイスモンスターが「樹氷」と呼ばれるようになったのはいつごろからなのか？ アイスモンスターはいつから全国的有名になったのか？ アイスモンスターはどうやってできるのか？

アイスモンスターは東北地方にしかないのか？ アイスモンスターはどのように変化してきたのか？ 最近のアイスモンスターの状況はどうなのか？